

11月号の内容

北朝鮮の核問題にどう対処するか
安倍新政権、海外からの評価
北朝鮮の核実験への対応：はたして前進か
著作権制度の転換点：「クリエイティブ・コモンズ」の利点
『スノーピーの処世哲学』

北朝鮮の核問題にどう対処するか

情 報発信セミナーの定例会が10月26日に開催され、アジアの主要問題が取り上げられた。第1部では、日本でビジネスを展開し、また国際大学などで教えたこともあるサンジャイ・セス博士が「インドの経済と問題点」というテーマでプレゼンを行なった。その後で活発な質疑応答があり、日本とインドとの関係が急速に深まっていることを実感させる内容であった。

それに引き続いて第2部では、木下俊彦早大教授が「最近の北朝鮮問題について」というテーマで現下の大きな問題を論じた。これまでの北朝鮮をめぐる問題の経緯を概観して、今後起りうることとして以下のポイントを指摘した。

- 1) 今後何が起っても不思議はない。機能不全の六カ国協議の体制を維持しつつ、北の譲歩(核放棄)を引き出すまで圧力を加えていくこととなる。
- 2) 韓国、中国、ロシアは、核再実験に

よる放射能汚染と、北朝鮮体制崩壊による大量難民発生を懸念。

3) 米国が恐れるのは、北の暴発で米国が戦闘行為に巻き込まれること(中東で手一杯)。

4) 各国が恐れるのは、核や中間原料がテロリストなどに渡ること。

そこで北朝鮮の「暴発」をどうやって抑えるかが問題となり、クーデター、亡命、暗殺などあらゆるオプションが検討されている。米国との二国間協議の可能性もあるが、米現政権が核問題での譲歩と交換に北朝鮮の体制維持や金融制裁の解除を約束することはありえないので、協議では問題は解決しないと木下教授は結論づける。

その後の質疑応答でもなかなかよい解決策は見当たらなかったが、木下教授の第1のポイント「今後何が起っても不思議はない」という言葉が最後まで重くのしかかるセミナーであった。

- - - 宮尾尊弘(情報発信機構長)



セミナーで講演する木下教授

情報発信機構とは

「情報発信機構」は、日本をめぐる重要問題について有識者や専門家の意見や討論をグローバルに発信することを使命とする非営利組織。

ウェブ上では情報発信プラットフォーム(www.glocom.org)で、オピニオン、ディベート、ニュースなどを発信、またニュースレターやメールマガジンも定期的に発行。さらにセミナーも毎月開催。

安倍新政権、海外からの評価

安倍新政権発足後一ヶ月、しかもその間、北朝鮮の核実験という大きな事件を経て、海外からも新政権の第一印象と言ったコメントが出始めている。

海外でまず注目されるのは、やはり外交面での立場や行動となるが、その意味では、北朝鮮問題での積極的役割、そして中韓

歴訪による両国との関係改善化の道を開いたということで、概ね高評価を得ている。

ウェブサイトに幾つかを掲載したが、例えば、以下の、米国イースト・ウェスト・センターのスミス氏の記事が良く纏まっている。

http://www.glocom.org/debates/20061027_smith_abe/

北朝鮮の核実験への対応: はたして前進か

日本在住コンサルタント チャドウィック・スミス

各国が北朝鮮に対し採ってきた孤立化と制裁の政策は、北朝鮮がもっとも重視する「体制維持」を危うくするものであることから、自らの存在を守るために核武装するというにはある意味で論理的な帰結であった。北朝鮮としては7月4日のミサイル発射実験があまり注目を集めなかったために、核実験をやっても何も失うものはないと感じたのであろう。

今となっては、外交交渉による問題解決は非常に難しくなってしまった。これ以上対決姿勢を強めることは、北朝鮮の頑固さをより助長し、さらに孤立させてその政治体制の変化を阻害することになってしまう可能性がある。

北朝鮮は、中国、韓国およびロシアの警告は言葉だけであり、真に戒めようとはしていないと思込んでいる。実際に三国は北朝鮮の体制が崩壊することによる深刻な影響を受けることを憂慮している。他方、

米国と日本は、今となってはいかなる妥協も拒否する以外に選択の余地はほとんどないと感じている。

北朝鮮がもつ核の野望を、外交手段によって封じ込め得なかったことは、各国が協力して軍縮に向かう道を狭める結果となった。しかし一方で、今回の核実験が、これからの核兵器の開発と拡散を防ぐための共同歩調をとる契機となる可能性がある。この意味で、国連安保理で中国も支持して全会一致で採択された制裁決議は、それが外交努力を再生させ、軍事行動を避けることに繋がれば一歩前進といえる。しかしながら、真のテストはすべての国がこの決議を協力して実施し、究極的に対話を生み出すことができるかどうかにかかっている。

<文責: 編集人>

英語の原文: "The Reaction to Pyongyang's Nuclear Test: A New Step Forward?"
http://www.glocom.org/opinions/essays/20061016_smith_the



安全保障理事会議場

著作権制度の転換点: 「クリエイティブ・コモンズ」の利点

国際大学グローコム主任研究員・助教授 上村圭介

情報ビジネスを展開する上で、著作権が欠かすことのできない要素であり、知的財産権が重要なものであるという意識が高まっている一方で、そのような権利がもたらす制約が問題となってきた。

情報技術の発展と普及は、著作物を取り巻く環境を大きく変容させた。デジタル技術により、コンテンツを劣化させることなく記録・複製することが可能になった。また、情報ネットワークは、コンテンツの流通における時間と空間の制約を取り除き、職業作家以外の人であっても自由にコンテンツを作成し発信することができるようになった。著作権物を取り巻く環境は、従来の想定から大きく変化した。

このような変化に対応する一つの答えが、「クリエイティブ・コモンズ」(CC)である。CCでは、人間の創作活動は無から生じるのではなく、既存の芸術的・文化的資産を吸収し、刺激をうけて進められるものであるとの認識に立ち、できるだけ多くの著作物が自

由に共有できる状態にあることが必要であるとする。

そこで、CCでは、この理念に賛同した作者に対し、著作物を公開する際にはCCライセンスという利用許諾を適用することを呼びかけている。CCライセンスに基づいて公開された著作物は、利用者による自由な共有を認める。

しかしCCはすべての著作物に自由な流通と共有を強制するものではない。また、正当な対価の徴収を否定するものでもない。この点でCCは著作権制度と対立するものではなく、むしろ補完する。

CCの考え方は、著作物の自由な流通と共有を取り戻すことで、創作活動本来のあり方を取り戻し、新しい時代への地平を切り開こうとするものである。

<文責: 編集人>

英語の原文: "Turning Point for Copyright System: Merit of 'Creative Commons'"
http://www.glocom.org/opinions/essays/20061002_kamimura_turn



著作権を補完する方法を

『スヌーピーの処世哲学』

(廣淵升彦著、海竜社、2006年)

「衝撃」が書かせた教育論・若者への応援歌

本書を書かせたのは、テレビ局員から大学教授という未知の領域に飛び込んだ著者が受けた衝撃である。若者の学力の信じられないほどの低下を目の当たりにし、生きる意欲、夢と希望のスケールが驚くほど小さくなっていることをつぶさに見た著者は、なんとかして彼らに元気を与えたいと願った。生きる意欲が生まれ、より刺激的な人生に立ち向かう気概をもってもらいたいという願望が根底にある。観念的な教育論よりも、具体的に魅力ある人物群像を示すことがより効果的だという思いに満ちた、新しい教育論といえる。

事物の本質を見る力を

最近の日本人は、物事を表面的にしか見ない。「本質に対する洞察力」を欠いていることが、外交や国際政治での停滞を招いている。多くの人々は、スヌーピーといえば「かわいいキャラクター商品」としか見ないが、彼と仲間の子供たちが活躍するマンガ集『ピーナッツ』は、人生の本質についての豊かな洞察力に満ち、文学的な香気あふれる作品なのである。欧米では、知的なリーダー層の間でも半世紀にわたり愛されてきたものだ。

筆者はなんとかしてそのことを知らせたいと願い、まず『スヌーピーたちのアメリカ』(新潮社、1993)を書いた。同時に『ピーナッツ』を通して人生、教育、国際政治、歴史、親子の情愛、恋愛、宗教といった幅広い分野についての自分の考えを語ってきた。本書はそうした試みの4作目に当たる。

全体の構成

全体は8章から成っている。意識をレベルアップする、機転をきかす、人情の機微に敏感になる、自分なりの美学をもつ、言葉の直球・変化球を使いこなす、心に響く言葉力を養う、詩(うた)ごころを生活に取り込む、自由な連想で頭をやわらかくするーといった内容である。

とは言っても今はやりの「ハウツーもの」ではない。内容ももっと楽しく、心にじわっとしみ込む何かがあるように工夫されている。読む前と読んだあとでは、明らかに人間が変わったと何人かの読者が告白している。

宇宙、はるかな過去、遠い異国、言葉の力

数例を挙げよう。ライナスとチャーリー・ブラウンが星空の下で話している。ライナスはこの銀河系だけで1000億もの星があることを、興奮しつつ語る。宇宙の壮大さに魅せられ興奮している友の話を聞いていたチャーリー・ブラウンはぼつりと一言いう。「ボクはボクの犬に会いたいよ」。キャンプに来て何日も会っていないスヌーピーに会いたいというのだ。ロマンあふれる天上の星と超目先の地上の犬への思いの対比が鮮やかである。

スヌーピーは毎回毎回「それは暗い嵐の夜だった」で始まる小説を書いているが、出版社に採用されたためしはない。読者は無邪気にこの犬の無駄な試みを笑っている。しかしこれは、19世紀のイギリスに実在した小説家をモデルにしたものだという。マンネリの背後にある文化と自作が売れなかったシュルツの苦闘時代がさらりと語られる。

有名なノルマンディー上陸作戦が行われた戦場から、スヌーピーは母に宛てた手紙を書く。作者シュルツの死者への鎮魂の思いと母への思慕が、このコマの中に滲み出ている。

このように本書には日常性から離れ、はるかな過去や遠い異国への思いを掻きたてる作品も多数登場する。著者がなによりも重視しているのが、「想像力」と「言葉の力」の大切さだ。今の日本を覆っている「生きた言葉の不在」をなんとかしなければという思いが伝わってくる。その意味で本書のタイトルは『スヌーピーたちの言葉は力』が最もふさわしかっただろう。

(廣淵升彦 国際ジャーナリスト)



Global Communications Platform from Japan

月報・日本から発信！

月1回月末発行
発行人・宮尾尊弘
編集人・浦部仁志

学校法人国際大学・情報発信機構
106-0032 東京都港区六本木 6-15-21 ハークス六本木ビル2F
TEL: 03-5411-6714 / FAX: 03-5770-1725

国際的な情報発信活動が
展開されるウェブサイト
情報発信プラットフォーム

<http://www.glocom.org>

後記

北朝鮮による核実験は世界を震撼させたが、とりわけ日本では、歴史的な背景もあり、国民挙げてこの行動を非難した。従来から北朝鮮に対しては比較的寛容であった人たちも、流石に今回は「きれいな核」を言うのを止め、北朝鮮に自制を求める発言を行っている。

折りしも、安倍新首相が、そのお披露目を兼ねて新政権の外交の先行きを占う機会としての中韓訪問、しかも北京からソウルへ向かいつつある最中の北朝鮮による実験発表は、それだけではないとしても、おそらくは首相の歴訪に水を差す狙いもあったのであろう。また、新政権誕生時の不安定な政府を揺さぶる狙いも或いはあったかも知れない。

しかしながら、新政権の反応は素早く、日本独自

の制裁発表・実施に踏み切ると共に、議長を務める国連安保理で積極的に活動し、七月のミサイル発射時に次いで、全会一致の制裁決議を導き出した。

早くから安倍政権誕生を見越した諸準備、これ自体が健全であるか否かには議論があるが踏まえれば、国民の安全を預かる政府としてあらゆる事態に備えて置くという意味で、まさに「想定内」の出来事であったということであろう。

核拡散防止という政策は、世界的には、その理念に於いても実践に於いても、所謂ダブルスタンダードの典型ではあるが、実際に凶器が存在する以上、その害を最小限に食い止めるための現実的な対応を常に模索して行かなければならないということであろう。

情報発信機構

経営委員会

青木 昌彦

猪口 孝

牛尾 治朗

行天 豊雄

小林 陽太郎

運営委員会

宮尾 尊弘（委員長）

佐治 俊彦

中馬 清福

勝又 美智雄